

ることであつて今日のトップレベルの技術はそのままでは明日は単なる普通レベルの技術でしかあり得ないということを覚悟しなければならない。すなわち我々がいささかでも現在のレベル達成に奢り満足し研鑽を怠るようなことがあればたちまちそのトップの座を自ら他に譲り渡すこととなり、せつかく築きあげた日本鉄鋼技術の基

盤は自ら崩壊の破目におちいる。多くの賢明有為なる会員諸氏の一層の研鑽と努力を心から期待したい。

終わりに本稿の起草にあつて格段のご協力をいただいた通産省の板谷憲次氏、えらびに鉄鋼協会関係者の労に対し深い謝意を表する。

コ ラ ム

“略語”を考へる

最近の学術雑誌を読んでいると、略語または略号がやたらと目につく。そのほとんどが英語である。私の専門の鉄鋼製錬の分野でも、LDをはじめQ-BOP, DH, RH, ESR, VOD, AOD など数多くの略語が用いられている。ちなみに昨年、日本金属学会から出版されたテキスト「鉄鋼製錬」(講座・現代の金属学、製錬編1)の巻末には、主な略語として45の略語とその語源が集録されている。しかしながらここにあるものはまだしも、最近ではなじみのない略語が、いとも簡単に生産される傾向にあり、中には一体何の略語なのかとクイズばりに頭を悩ますもの、まぎらわしいもの、さらには全く意味の理解できないものなど本来の略語の範疇から逸脱しているものが増えつつあるようだ。前述のESRも、製鋼関係者にはElectro-Slag-Remelting (またはRefining) と理解されるであろうが、材料関係者にはむしろElectron-Spin-Resonanceの意にとられ、まぎらわしい略語の一つである。

このような略語の氾濫は、長い言葉や表現を簡略化して理解を助けるという本来の合理性が最近では薄れて表皮的なものとなり、簡略化の風潮がその宣伝効果と相まって流行に乗り過ぎているためと思われる。こ

れには、わが国の企業も貢献しすぎているようだ。これらの略語が各企業内や組織内で慣用されていることにはもとより異存は無いが、それらが学術論文としてあるいは学会における講演発表などで平然と使用されつつある傾向には、ここらあたりでぼつぼつ歯止めをかけておく必要があるのではなからうか。

先日、蔵王での本協会主催の鉄鋼工学セミナーに参加した時のことであるが、製鋼コースのグループ討論である受講生グループは“SITTY Furnace”と“ZH-Process”なる斬新な成果を発表して喝采をあびた。ところで講師陣は予稿を見た段階では“SITTY”と“ZH”なる言葉が理解できず、(某教授は熱心にも英和辞典をしらべた!) 受講者の発表をきいて初めて前者は受講生グループの5人の名前(姓)のイニシアル、後者はセミナーの開催場所、蔵王ハイツのイニシアルであることを知った。これに対して講師陣もさつそく、彼らのグループ討論のテーマ「期待される鉄鋼技術者の育成」の中で、今我々が求めている技術者の理想像をV.S.O.P (Vitality, Speciality, Originality, Personality) なる略語にまとめて受講者に答えた。なおこれはブランデーの宣伝とはいつさい無関係であることを附記しておきます。

(大阪大学工学部 森田善一郎)